

教育課程研究指定校事業研究報告

—平成 18・19 年度指定—

幼稚園

平成 21 年 3 月

国立教育政策研究所
教育課程研究センター

はじめに

国立教育政策研究所教育課程研究センターでは、全国学力・学習状況調査、特定の課題に関する調査等の調査や各種指導資料の作成等を行うとともに、研究指定事業を実施し、各学校において学習指導要領に基づく教育課程が円滑に実施されるために、特に重要な課題について研究テーマを示し、指定校や指定地域での実践的研究を進めています。その成果は、各学校における教育課程の編成、指導や評価の改善などのために提供するとともに、今後の教育課程や指導方法の改善に向けた資料・データとして、中央教育審議会への報告等を行っているところです。

「教育課程研究指定校事業」は、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校における教育課程及び指導方法等について調査研究を行うことを通して、学校教育の改善充実に資するものであります。

本冊子に掲載した研究報告には、幼稚園において、「幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究」の主題に基づく具体的な取組の要点がまとめられていますので、これらの事例が全国の幼稚園や教育委員会等の参考となり、今後の学校教育の改善充実に資することを期待しております。

最後に、2年間の調査研究に熱心にお取り組みいただいた研究指定校の方々、関係教育委員会等の方々に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

国立教育政策研究所
教育課程研究センター長
中 岡 司

目 次

東京都	荒川区立南千住第二幼稚園	・・・	3
福岡県	北九州市立八幡東幼稚園	・・・	13
東京都	私立学校法人 駿河台大学第一幼稚園	・・・	23
資 料		・・・	33

東京都 荒川区立南千住第二幼稚園

ふりがな 学校名	あらかわくりつみなみせんじゅだいにようちえん 荒川区立南千住第二幼稚園
-------------	--

園長名：千明 素子

所在地：東京都荒川区南千住 8-2-1

電話番号：03-3891-5701

①	幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究 (平成18・19年度)
---	---

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

東京の再開発地域の幼稚園である。再開発事業の進展にともない高層の集合住宅が立ち並び、人口が増え続けている。園児の約98%は高層の住環境、核家族家庭であり半数以上の家庭が1,2年の間に他地域から転入してきている。本園では園児数の急増への施設面での対応とともに多人数のよさを生かした教育活動を進め、地域の公園や隣接する小学校の校庭も教育環境として活用し、園児、保護者が地域への親しみをもてるようにしている。

2 学校の概要 (平成19年5月1日現在)

		満3 歳児	3歳 児	4歳 児	5歳 児	計
学級数		0	1	2	2	5
園 児 数	男	0	10	19	28	57
	女	0	5	31	26	62
計		0	15	50	54	119

教員数
7名

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題等

(1) 研究主題

心も体もたくましい幼児の育成
－集団の教育力を生かして－

(2) 研究主題設定のねらい

園児は家庭で大切に育てられ、素直で、人に親しみやすい幼児が多い。しかし、友達とのかかわりでは様々な葛藤を抱えたり、思いを実現する場面ではすぐにあきらめたりする姿が見られる。体力面の向上も願い、教育目標の達成に向けて、「心も体もたくましい幼児」を、目指したい幼児像としてとらえた。

「集団とのかかわりの中で自己実現する幼児」を目的に向かって困難を乗り越える「たくましい幼児」とし、個の育ちと集団の教育力とのつながりをおさえながら検証を重ね、教師の指導の在り方を明らかにしていくこととした。

(3) 2年間の主な取組

[平成18年度の主な成果と課題]

- ・「心も体もたくましい幼児」について園内で共通理解が深まり、「たくましさ」の視点で日常の幼児の姿、活動や行事の取組をとらえていくことができた。
- ・個と集団の関係をおさえ学級経営を進め評価反省の視点が明確になってきた。
- ・集団の教育力の育ちについて検討を重ね、集団の形成過程をとらえた指導計画を作成してきたことで、学級や幼児のとらえ方が深まった。

[平成19年度の主な取組]

- ・指導計画のそれぞれの時期の教育力や幼児の姿、教師の援助を見直し、話し合いを重ねながら研究紀要の作成を行った。
- ・研究保育・事例研究を行い、研究主題の目指す幼児を育てる指導を明らかにしてきた。
- ・研究発表会を開催する中で公開保育、研究紀要の配布、研究協議を行い、本研究の成果を広めた。

2 教育課程の編成

(1) 教育目標

① 幼稚園の教育目標

幼児一人一人の特性を生かし、自主性、社会性、創造性を身に付けた感性豊かな心身ともに健康な幼児の育成を目指す。

元気な子 やさしい子 考える子

② 幼稚園の教育目標を達成するための教育課程編成の重点

目指す幼児像の具現化を図り、教育目標を達成するために、今年度は次の5点を教育課程編成の基本方針とする。

・幼児が自らすすんでかかわる環境の充実と整備を図り、直接体験を通して心身ともに健全な発達が促されるようにする。

・多人数のよさを生かし、一人一人の発達段階に沿った成長を促しながら、心も体もたくましい幼児を育てる。

・一人一人のよさや可能性を生かし合える場をつくり、幼児同士が互いに認め合い、尊重し合う人間関係をつくる。また、多様な友達関係が構築できるような交流を図る。

・身近な自然や多様な文化に触れ、感動体験を通して、好奇心や表現意欲を高め、幼児が様々な思考したり、創造性豊かに表現したりする楽しさが味わえるようにする。

・幼児が園生活の中で状況に応じて安全な行動がとれるよう計画的な指導を積み重ね、安全に対する構えを身に付けさせる。

(2) 指導の重点

① 教育課程の編成、実施にかかわる指導の重点

一人一人の個性を尊重し心身ともに健全な幼児を育成するために、体験的な活動を重視し、次のような重点をおいて指導する。

・広い園庭という環境を生かし、遊びの中で十分に体を動かすことを楽しみながら、体の諸機能の発達を促す。

・教師との信頼関係を基盤に、人とかかわる楽しさや友達のよさを知り、自分も他者も大切にしている心情を育てる。また、多人数の学級

集団でのかかわりを通し、多様な感情を体験できるようにすることで心の成長を図る。

・幼児が心を動かし、自らかかわっていきこうとする環境として、場、人、物の視点で環境を計画的に構成する。興味をもって自己実現できるような園庭の環境を整えていく。

・施設の特性を生かし、園庭での栽培活動を充実させ、身近に見たりかかわったり味わったりする体験を通して食べることへの関心を深めていく。

・汐入公園を教育環境として活用し、広い場所で体を十分に動かし健康な体づくりを目指す。

・近隣の小学校と施設の共用や行事参加、ふれあい活動を通して交流を図り、連携を目指す。

・地域の方や専門家などの豊かな人材を活用し、幼児が様々な大人の存在を知るとともに、親しみをもってかかわる機会を継続的にもつ。

(3) その他

・地域の諸機関と連携し、不審者対応、災害、事故防止のため安全に対する態度を育てる。

・家庭や地域社会に向けて、子育てにかかわる支援活動を計画し、地域の中での園の役割を果たす。また、PTAのサークル活動を支援し保護者が活躍できる場を提供していく。

・地域や保護者に園の教育内容を聞いていくとともに、地域で行われる行事にも積極的に参加する。

・園内研究を通し、幼児が集団とのかかわりの中で物事を追求したり目的を達成したりする体験ができるよう環境を整え、指導の在り方を学び合い、保育を充実させる。また、研究発表会を開催し、研究の成果を広く発信する。

・園便り、外掲示板等で教育活動を保護者や地域へ紹介し、園への理解を得ながら協力関係を築く。

3 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

- ① 「集団の育つ道すじ」の流れを事例研究と指導計画の作成を進める中でとらえる。
- ② 事例を5つの視点から見直し、検討する。
- ③ 年間指導計画の見直しを、幼児の姿、集団の教育力、教師の援助の視点から行う。
- ④ 「たくましい幼児」の育成に向けて、家庭との連携を深める。

(2) 取組

① 集団の育つ道すじ

事例研究と指導計画の作成を進める中で、集団の育つ道すじが見えてきた。

集団は次の①～④の順序で育っていくと考える。

① 群れ（漠然とした一体感）

- ① 教師との信頼関係をもとに居場所ができる
- ② 幼児同士がつながり心地よさを感じる
- ③ 生活の仕方や決まり、遊びのルールを共有する
- ④ 協同的なかかわりをもつ

② 群れ（漠然とした一体感）

幼児がそれまで過ごしていた家庭から初めての集団生活である幼稚園に入った初期の時期を、幼児が集まっているだけの群れの時期ととらえる。そこでは一人一人の幼児がそれぞれの思いで環境にかかわっているが、同年齢の幼児が同じ場所で同じ時間を過ごすことで、漠然とした一体感を感じていると考えられる。

① 教師との信頼関係をもとに居場所ができる

幼児たちは信頼できる大人である教師と出会い、一緒に楽しい経験を重ねながらつながりを確かなものにしていく。そして教師とのつながりをもとに、安心感をもって遊び始める。“大好きな先生”がいる学級だからこそ、学級への所属意識が芽生えるといえる。

② 幼児同士がつながり心地よさを感じる

教師をよりどころとして、学級の中で安心して遊び始めた幼児たちは、周りにはいる友達の名前を覚えたり、一緒に遊んだりしながらお互いに知り合っていく。そこで友達と一緒に楽しい経験や、思い通りにならない経験を積み重ねることで、だんだんその学級の幼児同士がつながり、心地よさを感じられる集団となっていく。お互いの存在をそのまま受け入れ合った居心地のよい集団で生活を共にすることで、学級の幼児同士のつながりも確かなものになっていく。

③ 生活の仕方や決まり、遊びのルールを共有する

幼児は友達とのかかわりの中で、それぞれの思いや意見の食い違いに出合い、時には衝突も経験する。また、自分の思いがすんなりと通らないことで葛藤が生まれる。幼児は、葛藤を見守り共に感情を揺り動かす教師や友達がいる集団の中で、お互いの気持ちや意見を調整し合せて、自分も友達も気持ちよく過ごすための生活や遊びのルールを獲得していく。そして、みんなで決めた生活の仕方や決まり、遊びのルールを共有する集団の中で、いろいろなものごとを経験しながら人間関係を深めていく。

④ 協同的なかかわりをもつ

自分たちで作ってきた共通のルールのもとで生活や遊びを共にするようになった幼児たちは、イメージを共有しながら一つの目的に向かって、それぞれ自分の役割を見出しながら協力して遊び始める。そして協同的なかかわりをもつ集団の中で、一人一人が自分を発揮しながら遊べるようになる。

② 集団の育つ道すじと年間計画

集団の育つ道筋を基盤にしなが、 “集団の育ちから見た指導計画” を見ると、

○年少は①・②が大切である。ゆっくりと行ったり来たりしながら、全体的に見れば③・④まで進んでいく。

○年中では、また、①・②に戻って学級づくりが始まる。それから③・④に進んでいく。

○年長でも特に1学期は、③・④だけでなく①・②も意識して丁寧に指導していき、教師とのつながりを深くし、学級が安心して活動できる場所と再確認させていく必要がある。

などのことが分かる。幼稚園での3年間又は2年間に、幼児と集団は、段階を追って成長していくのではなく、螺旋を描くように、行きつ戻りつしながら育つことがとらえられた。

③ 事例と年間計画の見直し

幼児一人一人の育ちを支え、集団の教育力を生かす指導を探るためには、幼児の実態から幼児同士のかかわり方の育ちを読み取りながら、その中に作用している教育力を知る必要がある。

そのため、事例分析の視点を次のように挙げ、考察の中に含めて記述するようにした。

- | |
|---|
| <p>a. どのように遊びを見つけたか
友達とのかかわりのきっかけは何か</p> <p>b. どんな葛藤をしているか</p> <p>c. 葛藤をどう乗り越えていくか</p> <p>d. そのときにどんな教育力が働いているか</p> <p>e. 教師の指導の在り方</p> |
|---|

④ 「たくましい幼児」の育成に向けて、家庭との連携を深める。

まず、「たくましい幼児」について家庭

へのアンケート調査を行い、保護者が願っている幼児の姿をとらえていくことにした。保育参加や運動会などの感想、幼稚園評価等に研究主題の視点をおさえた項目を設定し、回答を集めた。また、「うちの子、こんなにたくましくなった！」というエピソードを寄せてもらい、家庭での日常の姿の中から「たくましき」をとらえてもらうようにした。

保護者からの回答は以下の通りである。

保護者の考えるたくましい姿 (抜粋)
<p><3歳児></p> <ul style="list-style-type: none"> ・心身ともに健康な子ども ・“意欲”があり、挑戦する子 ・何事にもがんばっている姿 ・自分の考えを人に伝えられる
<p><4歳児></p> <ul style="list-style-type: none"> ・あきらめず頑張っているところ ・自分の考えで行動しようとする子 ・健康で元気な子ども ・人の気持ちを考えられる子ども ・何にでもチャレンジできる ・自分の感情をある程度コントロールできること、気持ちの切り替えが上手 ・自分の意見をはっきり伝えることができる ・優しく心豊かな子ども
<p><5歳児></p> <ul style="list-style-type: none"> ・園でも家庭でものびのび生活する子 ・自分も相手も大切にできる子 ・何事もチャレンジ！楽しむ気持ちをもてる子 ・ささいなことでへこたれない ・すぐに人に頼らず、自分でやってみようとする気持ち、姿勢 ・外で元気に遊び、健康で明るい ・心身ともに健康な子ども ・自然、動植物、周囲の人への思いやりをもてる子

結果の中で特徴的なのは、どの年齢でも心身の健康、チャレンジする姿が共通にあ

がっている点である。これは教師の考える「たくましい幼児」の姿と一致する。

そこで、幼稚園と家庭とで共に協力関係を築きながらたくましい幼児を育てていくために、園だよりや学級だより、保護者会、懇談会、保育参加等を活用するようにした。

その結果、当初は「とても家の子はたくましいとは思えない」と話していた家庭でも、「たくましい幼児」への理解を深め、少しずつ幼児の育ちを認める姿が見られてきた。

(3) 成果・課題

① 幼児の成長と変容

3歳児においては、教師が一人一人の幼児とのつながりを大切にしてきたことで、一人一人が安心して園で過ごしている。学級で集まる場を喜び、思いを体全体で表現することを楽しむ様子が見られる。また、好きな友達と同じ場で一つの物を一緒に使う姿が見られる。

4歳児においては、自分の思いと生活のルールや友達の思いとの違いに葛藤する様子がとらえられた。その姿を教師が受け止めたり、トラブルの場面に丁寧にかかわったりしてきたことで、友達のいろいろな思いを感じ、人とのかかわり合いが活発になってきている。

5歳児においては、集団で考え合ったり伝え合ったりする場を作ってきた。好きな遊び、行事や活動の中でも、自分の気持ちを相手に表現する姿や、自分が何をしたいのか・できるのかを選び取り、集団の中でどう動けばよいか考えて行動するようになってきた。「協同的なかかわり」「支え合う、認め合う」芽がはぐくまれてきている。5歳児になると、人とのかかわりの中で葛藤の内容も複雑になり、他者に対しての自己表現の仕方や

乗り越え方に変化が見られた。

② 「集団の育つ道すじ」の明確化と教師間での共有化

文献研究や研究保育、事例研究を通して「集団の育つ道すじ」が明らかになった。文献から、「集団」「集団のもつ教育力」「葛藤」「協同性」などのキーワードへの理解が深まった。

実際に「個の育ちをうながす集団の教育力」「集団の教育力を生かす指導」を検討していくと、3歳児の「群れ」の状態から、5歳児の「幼児同士が一つの目標に向かって協力しながら物事を進める」という方向に進んでいることがとらえられた。そして、成長の過程は行きつ戻りつしながら育つということもとらえることができた。「集団の育つ道すじ」を教師間で共通理解でき、研究を進めることができた。

③ 文献研究を踏まえた保育実践によるたくましさについての理解の深化

『幼児期から児童期への教育』を読み合うことにより、たくましさを獲得するということは幼児の自発性と協同性を育てることであるということが分かった。

「幼児は人とのかかわりの中で自発性を発揮することで、他児の思いに触れ、自分との思いの違いに気づき葛藤する。葛藤し、みんなと楽しく遊ぶにはどうしたらよいかを考え感情の幅を広げる。そのことが全体を見通した中で自分の役割を見出し、自分なりのかかわり方をしていくという協同性につながる」このような姿を実際の保育の中で見取ることができ、たくましさについて理解が深まった。

④ 新しい視点の獲得と指導の見直し

「集団の育つ道すじ」が明確になったことで、「個と集団」の関係性や集団の育ちから学級集団づくりを考える、という視点ができる。個を育てるための集団の在り方を考え、集団の教育力をどう生かし、指導を進めるかという視点からも保育を行うようになった。日常の保育の中で、教師は一人一人の幼児の他者とのかかわり方、集団とのかかわり方をじっくり見るようになり、幼児を見取る教師の視点が豊かになった。

また、「集団の育つ道すじ」から指導の在り方を見直すことができ、それぞれの発達の時期に応じた指導の重点を確認し合えた。

⑤ 教師間の共通理解と協力体制の深まり

研究を通して教師間の話し合いが多くもたれたことによって、お互いの保育の考え方に触れ、幼児を多面的に見ることができ、幼児の思いをより深く読み取るようになった。研究保育でもいろいろな教師の視点から幼児を見るようにしたことで、幼児の心の動きを細やかに分析するようになり、幼児理解が深まった。また、教師間の共通理解と協力体制もより深められ、園全体の指導力を向上させることができた。

⑥ 保護者への啓発

保護者に対して、保育参加・運動会・幼稚園評価等でのアンケートの中に「育ち合う」「たくましい」などの視点を盛り込んでいったことで、幼児のたくましさを見出す視点を提供することができ、我が子の成長した点に気付いてもらうことができた。

また、保護者会や降園時の連絡などで教師が幼児の育ちを知らせたことで、幼

児同士が共に育ち合うことの大切さを理解していただき、我が子だけでなく他児の様子にも温かな関心を寄せ、保護者間の交流も深まった。

4 研究成果の普及

- (1) 研究発表会を開催した。(平成19年度11月2日)その中で公開保育、研究協議を行い、本研究の取組や成果を広めた。
- (2) 研究紀要を作成し、上記研究会に参加された方と、後日各関係機関に配布した。

5 今後の展望

(1) 年間指導計画の作成

今回の研究では「集団の育ちから見た指導計画」を作成した。引き続き集団の育ちをおさえたい学級集団づくりを重ね、長期の指導計画の見直しを進める。さらに環境構成や教材の研究を加え、最新の年間指導計画を作成する。

(2) 教師の指導力の向上

作成した指導計画に基づいて、指導の視点を日々の保育、週案作成、学級経営等に生かすとともに、教師間の話し合いでは、教師集団の教育力を十分機能させ、個々の教師の指導力の向上を図る。

(3) 保護者との協力体制

今後も保護者の子育て観の中に「たくましさ」の視点をもってもらい、共に幼児の健やかな成長について考えていく。さらに家庭での食事、過ごし方、生活習慣等を見直す視点を焦点化し、伝えていくようにする。また、教師の考える「たくましさ」と保護者の考える「たくましさ」を行きかわせ、保護者と共に「心も体もたくましい幼児」の育成を進めていく。

共通の目的に向かって一緒に取り組む友達の存在	5歳児 2月上旬（V期）
“みんなで得意技大会をしよう！”	
<p>1月のお正月遊びの会で、コマやけん玉、お手玉、あやとりなどを経験した幼児たち。2月の誕生会で、年長児はできるようになったものを得意技として年少児、年中児に見せることになった。教師の「誰か何を見せることにする？」の問いかけに、「うまくできる人が見せるのがいい」「上手にできるものじゃないとだめ」「みんなで練習する」「小さい組がびっくりするものを見せたい」などいろいろな意見が出た。みんなで相談した結果、“見せたいものを全員の前でやってみて、みんなが得意技と認めたものを見せる”ことにした。</p> <p>幼児たちは、見せ合う時間まで、「すごい！」「私のほうが上手」などと言いながら、友達と一緒にいろいろな技を見せ合ったり、練習し合ったりしていた。</p> <p>いよいよ得意技を決めるときになって、A児は「誰もできない技」とけん玉に挑戦し、B児はコマの連続回しなどを披露して、友達にも認められた。ところが、C児が縄跳びを見せると周囲の幼児から「それはみんなができるから違う」と声上がり得意技と認めない場面もあった。D児も上手に跳べるが、自分で「これはみんなができるから得意技じゃない」と辞退した。“これは得意技”“これは得意技じゃない”など、一人一人得意技に対する思いや意見が違う幼児たちだったが、みんなで相談して、自分たちで得意技として見せられるものを決めることができた。</p> <p>その後は、得意技に磨きをかけるために「こうやるんだよ」「見てて」など練習する幼児や友達の様子を見て応援する幼児、「看板がいるよ」「私たちは飾りを作るね」と、友達と一緒に会場になる遊戯室の装飾を考えたり、材料をそろえて製作する幼児など、一人一人が必要なことを考え、友達と相談しながら準備を進め、見せる日を楽しみに待った。</p> <p>当日、技を見せる幼児はしっかり見せようと真剣な様子だった。見ている幼児も「頑張ってるね」と声をかけたり、静かに見守ったり、全員が気持ちを一つにして取り組んでいる様子が見られた。</p>	
＜ 考 察 ＞	
<p>a. <u>誕生会で得意技を見せることになった年長児</u>。自分の気持ちだけで考える幼児と、友達の様子を客観的に見られる幼児もいてb. <u>一人一人の得意技に対する思いや意見が違っていた</u>。教師は全員で話し合うことで、意見の違いに気づき、考えを出し合って「自分たちの得意技大会」を作り上げてほしいと考えた。また、得意技を見せる幼児だけでなく学級の幼児全員が主体的にかかわる活動にしたいと考えた。</p> <p>学級で行った話し合いの結果、実際に得意技を見合ったことでc. <u>幼児たちの見方が広がり、自分たちの基準ができた</u>。そして自分たちで、<u>みんなが納得するものを選ぶことができた</u>。そのことが、得意技を見せる幼児だけでなく、クラス全員の意欲を高めたと思われる。そして根気よく練習をしたり、練習する友達を自分のことのように応援をしたり、看板や、装飾を考えて作ったり、当日は張り切っているすを並べたりするなど、幼児一人一人が自分の役どころを自覚し、お互いの様子を見合いながら準備を進め、意欲的に得意技大会に向かうことができた。</p> <p>その後、年少中組でもコマやけん玉に興味をもつ幼児が増え、練習する姿が見られるようになった。年長児が年少中児の憧れになったと思われる。また年長児がそのような年少中児の様子を見守りながら、優しく教える様子も見られた。自分たちで行事をやり遂げた満足感が年長児の自信と優しさを支えていると思われる。</p>	

- d
- ・話し合いのできる学級や学年の雰囲気。
 - ・お互いのことをよく知り合い、役割を分担しながら、任せたり、力を貸したりできる友達関係。
 - ・自分のすることを見守ったり励ましたりしてくれる友達や教師の存在。

e

お互いよく知り合った学年の実態を踏まえ、教師は幼児が一つの目的に向かって活動する機会を作った。また教師も集団の一員として、意欲を高め、自信をもって取り組めるような言葉かけやかかわりをしてきた。

集団の育ちから見た指導計画年長組V期（1月～3月）

		互いのよさを認め合いながら、学級集団として、共に生活することを楽しむ時期					
他者とかかわる幼児の姿		縄跳び、コマ回しなど自分なりの目標に向かって繰り返し取り組む。	共通の目的がわかり、役割分担がもめることなくスムーズにでき、自分たちで遊びや活動を進める。	自分と同じ目標をもっている友達を意識して一緒に遊んだり競い合ったりする。	年中児に当番活動を引き継ぐことで、自信をもって仕事を教えたり、飼育物に優しく接する気持ちを伝えたりする。	修了、入学に対する喜びや期待をもち、最後の園生活を楽しみながら修了に向けての活動にすすんで取り組む。	
	①						
個の育ちをうながす集団の教育力	②	共通の目的に向かって見守ったり、協力したり、励ましたりしてくれる友達の存在。	お互いよく知り合い、任せたり、力を貸したりできる友達とのつながり。	勇気をもって正しいことを主張する幼児や後押しをする友達の存在。	善悪の判断をし、互いに気持ちよく過ごせるように考える学級。	自分たちに憧れの気持ちをもっている年中児の存在。	修了、入学と一緒に喜んだり期待をもったりして共に活動する友達の存在。
	③						
	④						
集団の教育力を生かす指導	①	勝っても負けでも気持ちよく終われるよう取り組みの過程を大切にします。	十分に話し合いをして、イメージを共有できるように時間や場所をつくる。	幼児同士が役割を決めて遊びを進める姿を認め、自分の役割に自信をもたせる。	自分の役割に根気よく取り組んだことや、協力して最後まで頑張ったことを認める。	一人一人のよさや得意なことを認め合える雰囲気をつくっていき、心地よさが感じられるようにしていく。	園生活を振り返り、心身の成長と一緒に喜びながら幼児同士が最後の園生活を楽しんでいる姿を見守る。
	②						
	③						
	④						自分たちがしてきたことやできたことを保護者や年少中児に見せ認められる機会を設け、大きくなったことが実感できるようにする。

福岡県 北九州市立八幡東幼稚園

平成18・19年度教育課程研究指定校事業成果報告書

学校名	きたきゅうしゅうしりつやはたひがしやうちえん 北九州市立八幡東幼稚園
-----	---------------------------------------

園長名：池尻 京子

所在地：福岡県北九州市八幡東区高見 3-1-32

電話番号：093-652-2087

①	幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究（平成18年・19年度）
---	--

I 研究指定校の概要

1 園・地域の特色及び実態

本園の園舎に沿って板櫃川が流れ、地域には金比羅山や緑の多い公園などがあり自然環境に恵まれている。また、小、中学校、盲学校や地域の年長者と年間を通じた交流活動を行っている。このような中で、幼児たちは身近な生き物への興味をもったり、地域の人たちに進んでかかわったりするなど、明るく元気に活動している。また、保護者も様々な面で園に大変協力的である。幼児への接し方は、幼児の思うままの行動を受け入れがちで、過保護な面があり幼児が十分に自己を発揮しきっていない面が見られる。

2 学校の概要（平成19年5月1日現在）

	3歳児	4歳児	5歳児	計
学級数	1	1	1	3
園児数	児	10	18	23
	女	5	10	9
	計	15	28	32
				75

教員数
4名

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題等

(1) 研究主題

幼児が自己発揮し、互いに育ち合う集団を目指した教師の援助の在り方を探る。

(2) 研究主題設定のねらい

幼児は一見活発に遊んでいるように見えても、一人一人の遊びの様子に着目すると、自己のよさやもち味を十分に発揮しながら遊び込んでいる状態にはいたっていない姿が見られた。また、教師も「できる」「できない」という幼児の表面的な行動に表われた姿にとらわれがちで、育ちを促す適切な援助にいたっていない姿があった。

そこで、一人一人の幼児が自己発揮し、互いに育ち合うために幼児の発達の姿や内面を確かにとらえた環境の工夫や教師の援助の在り方について研究を推進する。

(3) 2年間の主な取組

[平成18年度の主な成果と課題]

- 日々の保育記録や研究保育をもとにした研究は、各教師の援助の在り方を振り返るよい契機となった。それまで教師は幼児の表面的な姿をとらえがちであったが、幼児の発達する姿や内面を理解しようという意識をもつようになってきている。この教師の意識の変容は、幼児一人一人が自分なりの思いを出しながら遊び込む姿や友達と一緒に育ち合う姿となって表れてきている。
- 一人一人の幼児が自己発揮するための教師の援助の在り方に重点を置きがちであった。幼児が友達とかかわり合い、葛藤や挫折を経験しながらも刺激し合ったり認め合ったりして互いに育ち合うための具体的な教師の援助の在り方について研究を深める必要がある。

[平成19年度の主な取組]

- 幼児の発達の姿や内面をとらえた適切な援助になっているか、日々の保育の振り返り記録やビデオカンファレンスをもとに、さらに研究を深める。
- 幼児が互いに育ち合い協同的な学びにつながるための教師の援助や環境構成の工夫について実践研究を深める。

2 教育課程の編成

	期	発達の過程	ねらい
三歳児 (気に入った遊びにじっくりと取り組む時期)	I	先生大好き 園生活に親しみ安定していく時期	○ 園生活の流れを知ったり、先生と触れ合ったりしながら安心感をもつ。 ○ 自分の気に入った遊具や場を見つけて遊ぶことを楽しむ。
	II	おもしろいことみつけた 気に入った遊びを楽しむ時期	○ 園生活に慣れ、自分でできることは自分でしようとする。 ○ いろいろな遊具や素材とかかわりながら気に入った遊びを楽しむ。
	III	もっとしたい またしたい 好きな遊びをじっくりと楽しむ時期	○ 身の回りのことはできるだけ自分でしようとする。 ○ 自分の好きな遊びを見つけて遊んだり、気に入った友達と一緒に遊んだりする楽しさを味わう。
	IV	友達と一緒に楽しいな 自分なりの思いをもって遊んだり、友達と一緒に過ごしたりすることに楽しさを味わう時期	○ 生活の流れが分かり、生活に必要なことはできるだけ自分でしようとする。 ○ 自分なりの思いを出して遊び、友達とのかかわりを楽しむ。
四歳児 (好きな遊びを中心に友達と影響し合いながら遊びに取り組む時期)	I	友達がたくさんになった ㊦ 自分なりの動きを楽しむようになる時期 ㊧ 好きな遊びや先生との触れ合いを通して安定していく時期	㊦ 新しい環境に慣れ、気の合う友達と好きな遊びを楽しむ。 ㊧ 園生活の仕方を知り、好きな遊びを見つけて遊ぶことを楽しむ。
	II	ぼくもやってみよう ㊦ 自分なりのイメージややり方を楽しむようになっていく時期 ㊧ 園生活に慣れ、先生や友達に親しみをもって遊ぶようになる時期	㊦ 自分なりのイメージをもちながら遊び、気の合う友達とのかかわりを楽しむ。 ㊧ いろいろな素材や遊具を使って、好きな遊びを楽しむ。
	III	仲間に入れて 気の合う友達とのつながりを求めながら触れ合って遊ぶことを楽しむようになる時期	○ いろいろなことに興味をもって遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 友達と一緒に力一杯に体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。
	IV	いいこと 考えた 気の合う友達と遊ぶ中で、自分なりの思いを出して遊ぶようになる時期	○ 自分なりのイメージを表現することを楽しむ。 ○ 自分なりの思いを出しながら、気の合った友達と遊ぶ楽しさを味わう。
	V	みんなでしよう いろいろな遊びにじっくりと取り組んだり、友達にイメージを伝え合って遊んだりするようになる時期	○ 友達と気持ちを合わせて遊びを進める楽しさを味わう。 ○ いろいろな遊びや行事の中で、自分なりの力を発揮してがんばろうとする。
五歳児 (試したり工夫したりして遊びに取り組む時期)	I	年長組うれしいな おもしろそうなことないかな 年長児になった喜びをもち、自分から活動に取り組む時期	○ 年長になった喜びをもち、生活や遊びに進んで取り組もうとする。 ○ 自分の考えを出しながら、気の合う友達と遊ぶことを楽しむ。
	II	やってみよう、試してみよう 自分なりの目的をもち、試したり工夫したりする時期	○ 自分なりの目的をもって試したり工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう。 ○ 友達とのかかわりの中で、自分なりの考えを出したり友達の考えを聞いたりしながら遊ぶことを楽しむ。
	III	みんなで もっと面白くしよう 友達と力や考えを出し合いながら、遊びに取り組む時期	○ 自分なりの目的に向かって試したり工夫したり挑戦したりしながら取り組み、満足感を味わう。 ○ 友達と考えを出し合いながら遊びを進めていく楽しさを味わい、友達とのつながりを深めていく。
	IV	みんなで一緒に 取り組もう 友達と共通の目的や見通しをもって遊びや生活を進めていく時期	○ 自分なりの目的をもち、根気よく取り組み達成感を味わう。 ○ 学級やグループの友達と共通の目的や見通しをもち、自分たちで遊びや生活を進める喜びをもつ。 ○ 1年生になる喜びや期待感をもつ。

3 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

一人一人の幼児が自己発揮し互いに育ち合うために幼児の発達の姿や内面を確かにとらえた環境構成の工夫と教師の援助の在り方を探る。

(2) 取組

① 研究課題の共通理解を図る。

自己発揮している姿とは

- 自分なりの目的をもっている。
- 自分なりに試したり工夫したりしている。
- 自分の思いを伝えて遊んでいる。
- あきらめずに根気よく取り組んでいる。
- 自分なりにこだわりをもって取り組んでいる。

互いに育ち合う姿とは

- 友達の遊びに刺激を受け、遊びの幅や経験を広げている。
- 友達とイメージを伝えながら遊んでいる。
- 友達のよさやがんばりに気付いたり認め合ったりしている。
- 互いに思いや考えを受け止め合いながら遊んでいる。

発達の姿とは

- 遊びに取り組む意欲や友達とのかかわりの様子などからとらえられる幼児の育ちつつある姿である。
 - ・ 一人一人の幼児の育ちつつある姿
 - ・ 学級全体の幼児の育ちつつある姿

内面を確かにとらえるとは

- 幼児の表面的な行動や遊びの姿ではなく、行動のもとになるものや背景などをとらえる。・・・『なぜなのかな?』
- 幼児の興味の在り方や心の動きなどをとらえる。・・・『何を楽しいと感じているのかな?』『どのようにしたいと思っているのかな?』

以上のような考えのもとに事例研究を推進する。

② 教師の援助の在り方を探る事例研究を行う。

事例1 幼児の発想を大切に受け止めていったことで、一人一人が魚釣りのイメージをもちながら遊びを楽しんだ事例

11月7日 3歳児 A児の遊びから

A児は、トイレットペーパーの芯をつないで剣を作っていたが、突然「魚釣りしよう。」と言いだした。すると、T児やU児も「ぼくもする。」と言いだし、A児がソフト積み木を運び出すと、T児たちも一緒に運び四角に積み木で囲いを作った。A児は、ままごとの食べ物をかごと運んできて、その囲いの中に食べ物をザーザーとすべて入れた。A児は、「これ魚のえさだよ。魚が、これ、食べるんだ。」と言う。教師は、「へー。魚のえさにしたの。」と言うと、A児たちは、「うん」とうなずく。

教師のとらえと思い

ペーパーの芯をつなぎ剣を作っていたが、その長さから釣竿のイメージが湧いたのだろう。積み木を運んで釣る場所を自分たちで作っていることを十分に認めながら、どのようにしたいのか見守り、イメージを受け止めた援助をしていこう。



幼児の姿と教師の援助

A児は、いろいろな素材を置いているワゴンから毛糸を取り出し、それを切って棒に付けると、毛糸の先にセロハンテープを付ける。教師が「それは何?」と聞くと「これで釣るんだ。」とA児は答える。教師が「へーそれで釣るの?やってみせて。」と言うと、A児は積み木の囲いの中のバナナを釣ろうとした。初めは毛糸をじっと持っていたが、セロハンテープが付くように毛糸を上下に動かし、バナナをついに釣り上げた。

教師のとらえと思い

釣りたいという思いがセロハンテープでやってみるという自分なりの考えを生み出している。「やってみせて。」という問いかけが、「ほら、こうやるんだよ。」という自分なりの考えの確認と満足感につながったようだ。

教師の援助

「面白いね。大きなバナナがよく釣れたね。」と声をかけ、A児の発想や釣れたという満足感がもてるように認める。

幼児の姿

A児は教師から認められるとうれしそうにならずき、遊びを繰り返した。

T児やS児は、近くでA児がする様子をじっと見ていたが、A児と同じように自分たちも釣り竿を作り始めた。セロハンテープが付かずに、何度も毛糸を指で押さえながら付けていた。でき上がると早速竿を持って釣り始めた。T児は、竿をじっと持ってリングを釣ろうとしている。セロハンテープがリングに付いても、持ち上げると外れる。それでも何度も試し、釣れると「先生、見て見て。」とうれしそうに見せに来る。

教師のとらえと思い

A児と教師とのやりとりを見て、T児やS児は「面白そうだな。ぼくもやってみたい。」と思ったようだ。何度も試していることを認め、釣れた喜びや満足感がもてるようにしよう。

教師の援助

「すごいね。リングが釣れるまで、やってみていたね。釣れてうれしいね。」と認め、思いに共感する。

魚釣りのイメージが広がるように、画用紙を魚の形のように数枚切って置く。

幼児の姿

幼児たちは、教師が作った魚を見付けると、早速海の中に魚を入れる。そして、竿に付けた毛糸の先をじっと見たり、少しだけ上下左右に動かしたりしている。釣れると「やったー！釣れたよ。先生、見て見て。」と喜んだ。しばらくするとI児が、「もっと魚がほしい。」と教師に言う。

教師のとらえと思い

「魚」を釣ることで、魚釣りのイメージがよりはっきりとし、「もっと魚がほしい。」という思いが出てきたようだ。

教師の援助

幼児が自分で作ることができるように画用紙やクレパスなどを準備する。

幼児の姿

S児やM児は、早速画用紙を切り始める。教師が「何ができるのかな？」と問うと、「クジラだよ。」と得意そうに答える。また、教師が「いろいろな魚ができたね。」と驚くと、他の幼児も魚を作り始め、目や線を描いたり、魚全体を赤く塗りつぶしたりしながら思い思いに作る。

11月12日 「また 魚釣りしたい」

教師の援助

<雨天時> 自由に選んで使えるように空き箱、トイレトペーパーの芯、新聞紙や包装紙、ドングリやモミジの葉などを準備する。

幼児の姿

初めは、空き箱で好きなものを作っていたが、A児が、「また魚釣りしたい。」と言って、新聞紙を切って魚を作る。「みんな、見て見て！ほら大きいよ。」と周りの友達に言葉をかけている。しかし、他の幼児はそれぞれの遊びに夢中でA児の呼びかけに反応がない。するとA児は「先生、大きい魚ができた。」と見せに来る。

教師のとらえと思い

A児は、大きな魚を作った喜びを伝えたかったようだ。教師はその満足感を十分に受け止めよう。

教師の援助

「ほんと、大きい魚ができたね。切るのが難しそうなのに、すごいね。」と認める。

幼児の姿

S児は、オレンジ色の画用紙で魚を作り「先生、見て見て！魚ができた。」と教師にうれしそうに見せに来る。

R児は「笑っている魚ができた。」とうれしそうに教師に伝え、M児やS児は前とは違う色の画用紙を選んで魚を作る。M児は「先生、タイができたよ。」



S児は「ぼくは、サバができた。」と教師に見せに来る。

教師のとらえと思い

色や形から幼児なりにイメージした魚のようだ。一人一人の幼児のイメージと「見て、私も作ったよ」という思いを受け止めたかかわりをしよう。

教師の援助

一人一人の幼児なりのイメージを受け止めながら、「タイができたの。すごいね。」「S君はサバなの。名前をよく知っていたね。」などと認めていく。

幼児の姿と教師の援助

R児がモミジの葉にマジックで目を描いていたので、教師が「何を作っているの？」と尋ねると、R児は「魚よ。」と言いながら、モミジの葉を2枚セロテープで付けて葉っぱの上に目や口をマジックで描いた。「お魚になったね。モミジの葉でかわいいお魚ができたね。」と、R児なりの考えを認める。

教師のとらえと思い

画用紙だけでなく興味をもったモミジの葉でも魚を作ってみようと思ったようだ。R児なりの発想を認めよう。

<事例を通して分かったこと>

○ 幼児が自由に選んで使って遊ぶことができるように様々な素材を準備していたことで、幼児なりのイメージが広がりやすく、魚釣りの遊びを楽しむことができた。

○ 教師は、A児の遊びに『面白そうなことを始めたな。』と関心をもち見ていく中で、A児なりの発想を認めたりイメージを引き出したりすることができた。また、A児と教師のかかわりの様子を周りの幼児が見ることで「面白そう。私もしたい。」と自分からイメージをもって遊びに取り組むことができた。「先生、見て見て。」という言葉に表れているこの時期の3歳児の発達の姿をしっかりと教師がとらえた援助の大切さが改めてわかった。

一人一人の幼児のイメージや発想を柔軟に受け止める教師の姿勢が、幼児が自己発揮する姿や友達とイメージを共有して遊ぶ姿につながった。



事例2 Y児が友達とのつながりを感じることができるよう援助したことで、友達と考えを出し合いながら遊ぶことを楽しんだ事例

学級の実態

5歳児 11月6日

竹馬や登り棒など自分なりの課題に向かって根気よく取り組み、達成感を味わっている。その中で、友達のよさやがんばりに気付き、認め合う姿も見られるようになってきている。室内では、マルチパネや大型積み木などを使って友達と力を合わせたり考えを伝えて遊んだりするようになってきている。

<教師の援助のポイント>

- 友達の力を必要とする大型積み木や段ボール箱や、遊びに必要なものを作ることができるように木の実や空き箱、空き容器、色画用紙などを準備する。
- 友達との遊びの中で、一人一人の幼児のイメージや考えを引き出しながら、友達と一緒に遊びを進めていく楽しさが感じられるように援助する。

今までのY児の姿

- ボール遊びやアニメのキャラクターごっこなど、体を動かして遊ぶことを好み、友達と一緒に遊ぶ場を作り上げるなどの経験が少ない。また、友達と遊んでいるうちについ本気になったり思いがうまく伝えられなかったりして、手を出してしまうことがあり、友達から注意されると遊びから離れてしまうことが度々あった。

幼児の姿

Y児は、R児たちがドングリゲーム作りを始めたことに興味をもち自分から仲間に加わった。初めは、D児と一緒に積み木を運んだり、R児たちと「坂を作るんだよね。」「どこに置く?」「ここに作る?」と相談したりしながら組み立てている。途中から、Y児は友達が積み木を組み立てる様子をじっと見ながらそれに合わせて置いたり、自分なりに考えて積み木を積み上げたりしている。



教師のとらえと思い

今まで友達と一緒に遊び場を作るという経験が少なかったY児の中に、友達に合わせようという思いがあるようだ。友達と一緒に作る中で、徐々に自分なりの考えも出し始めた。友達と考えを出し合って遊ぶ楽しさを味わってほしい。

教師の援助

- 「Y君、D君たちと一緒に作っているんだね。」と、友達と力や考えを出しながら一緒に作ろうとしていることを認める。

幼児の姿

でき上がると、早速Y児たちは順番に並んでドングリを転がし始める。R児は、白い紙を上げながら「レディ・ゴー。」とかけ声をかけ、友達に知らせている。しばらくしてR児が「私、ゴールの方に行くから替わって。」と言うと、すぐにY児が「いいよ。ぼくがする。」と替わり、「ねえ、何と言うの?」とR児に尋ねている。



教師のとらえと思い

スタートの合図を出す役を、自分もしてみたいという思いがあったようだ。遊び場作りにY児自身もかかわったことで、遊びのイメージを共有することができ、楽しさを感じているようだ。

幼児の姿

Y児は、張り切って友達に「レディ・ゴー。」と白い紙を上げて合図を出している。時折、ゴール係をしているR児やA児の様子をじっと見ていた。しばらくすると「だれか替わって。」と声をかけるが、だれも気付かずに困った表情をしている。

教師のとらえと思い

Y児は、ゴール係に興味があるようだ。Y児の思いが周りの幼児に伝わるように仲立ちをしよう。

教師の援助

「Y君、並んでいる人たちにも言ってみたら。」と再度友達に伝えるように促す。

幼児の姿

Y児は、スタート係を替わってもらい、ゴールでA児と一緒に友達の転がしたドングリを紙カップで受け取り始めた。「ゴール！」と大きな声でゴールに入ったことを友達に知らせたり、ゴール前のトンネルの途中でドングリが止まっていないかのぞいたりしている。しばらくして、A児が「二人で順番にするのよね。」とY児と顔を見合わせながら、ドングリを交代して受け取るように決めたことを教師に伝えた。

教師のとらえと思い

A児は遊びの中で自分の思いを通しがちであったが、ドングリを交代で受け取るという発想に、A児の育ちを感じた。また、A児の提案ではあるが、A児の考えを受け入れているY児も十分に認めよう。

教師の援助

「へえー、二人でいいこと考えたね。AちゃんとY君と交代するんだね。」と二人で決めたことを十分に認める。

幼児の姿

遊びを繰り返すうちに、S児が手で払うようにしてドングリを転がしたり、R児が坂の途中でドングリを受け止めたりし始めた。

すると、その様子を見つけたY児は、怒った表情で「だめよ。そんなことしたら、面白くないよ。」と自分の考えを友達に伝え、止めさせようとする。周りにいた幼児も「そうよ、だめよね。」と声をそろえて言った。周りの友達に批判されたS児やR児は、「ごめん。」とつぶやき悪いことをしてしまったというような表情をした。その様子を見て、Y児はちょっとはにかむように笑っていた。

Y児はその後も、ゴール係になって壊れた場所を修理したり、新しく加わった友達に張り切って遊び方を教えたりするなど、遊びを楽しんだ。

<事例を通して分かったこと>

○ 様々な素材を準備したことで、幼児は考えたことをすぐに行動に移し、遊びに必要なものを作っていた。また、大型積み木を準備したことで、幼児同士に自然なかかわりの場をつくり出した。Y児自身も“友達と一緒に作った遊び場”という思いを強く感じる事ができた。

○ 教師は、友達のしていることに興味をもったY児の思いを受け止めたり、友達とのつながりを感じることができるよう援助をしたりした。Y児がスタート係やゴール係を張り切っている姿を見て、友達がY児の意見に賛同したり、一緒にS児たちに思いを伝えたりしたことも、Y児にとって友達とのつながりを感じることができたうれしいできごとだった。

教師がY児の内面をとらえた援助をするために、Y児の姿を見守り・見届ける姿勢をもつように心掛けたことで、

Y児が友達とのかかわりの中で自己発揮する姿とともに、幼児が協同して遊ぶ楽しさを味わわせる援助につながった。



<2年間の事例研究から分かってきたこと>

◆ 幼児が自己発揮して遊ぶためには

○ 教師は、幼児が「何を楽しんでいるのかな」「なぜ、こうしたのかな？」など、幼児の内面を理解しようとしながら、幼児と応答し合ったり一緒に遊んだりする中で、幼児のイメージや考えを引き出していく援助が必要である。

○ 環境の準備や教師の認めや励ましなど、幼児が満足感や達成感を味わうことができる援助が必要である。

満足感や達成感

次への意欲・自己発揮

◆ 互いに育ち合う集団を築くためには

○ 教師は、学級の幼児がどのような発達の過程にあり、育とうとしているところはどのようなことかなど、幼児の発達の姿を確かにとらえる。

○ 発達の姿に応じた環境構成の工夫
○ 友達とつながりを感じたり、かかわり合ったりしながら遊ぶ楽しさを味わわせる援助

見過ごさず・見届けて援助する教師の姿勢

友達と協同して遊ぶ満足感や達成感

③ 発達の姿を確かにとらえた援助をしていくために幼児の発達の姿を見直す。

◆ 期の発達の姿からねらいを検討

例 5歳児Ⅰ期（4月～8月）のねらい【現行】

○ 年長になった喜びを感じながら、園生活を楽しむ。
○ 自分の考えを出しながら、気の合う友達と遊ぶことを楽しむ。
○ 身近な小動物とかかわったり、植物の世話をしたりして親しみの気持ちをもつ。

協議内容

現行の教育課程では、5歳児の4月から8月までをⅠ期ととらえているが、実際の幼児の姿は5月を過ぎた頃に、自己発揮する姿や友達とのかかわり方に変化が見られる。育ちの節目はこのままでよいのか？

5歳児Ⅰ期（4月～5月）のねらい ↓ 【改訂】

○ 年長組になった喜びをもち、生活や遊びに進んで取り組もうとする。
○ 自分の考えを出しながら、気の合う友達と遊ぶことを楽しむ。

5歳児Ⅱ期（6月～8月）のねらい

○ 自分なりの目的をもって試したり工夫したりして遊ぶ楽しさを味わう。
○ 友達とのかかわりの中で、自分なりの考えを出したり友達の考えを聞いたりしながら遊ぶことを楽しむ。

◆ 教育課程の見直し・・・省略

(3) 成果・課題

○ 日々の保育記録や研究保育をもとにした研究は、各教師の援助の在り方を振り返るよい契機となった。教師の意識の中に、幼児の発達の姿や内面を理解しようという思いが強くなってきている。そのため幼児の行動に表れた背景にあるものや心の動きに、教師自身が心を揺らしながら援助を探っていくとする姿勢が見られるようになった。

この教師の意識の変容は、幼児一人一人が自分なりの思いを出しながら遊び込む姿や友達と互いに育ち合う姿となって表れてきている。

○ 幼児の発達の姿や内面をとらえた援助を行いながら、幼児が自己発揮し互いに育ち合う集団になるようにと願っていてもなかなか適切な援助になっていないこともある。

そのためには、日々の振り返りが翌日の援助へとつながっていくような記録の取り方の改善が必要である。

○ 幼児が友達とかかわり合って遊びを進める中で、より協同的な学びにつながるための援助の在り方を探る必要がある。

4 研究成果の普及

○ 北九州市立教育センターの幼稚園教育研修において事例発表を行った。（19年7月）

○ 2年間の取組を研究紀要として作成し、北九州市立教育センターに提出、閲覧できるようにする。また、市内の公私立幼稚園へ配布し、研究内容の普及を図る。

5 今後の展望

○ 一人一人の幼児が集団とのかかわりの中で、自己実現を図るためには、教師が毎日の援助の在り方を評価・反省し、翌日の援助に生かすことを重ねていくことが必要である。援助の在り方が具体的に導き出されるような記録の取り方について研究を深める。

○ 改善した教育課程の検証を行う。

東京都 私立学校法人
駿河台大学第一幼稚園

学校名	しりつがっこうほうじん するがだいだいがくだいいちようむえん 私立学校法人 駿河台大学第一幼稚園
-----	---

園長名：片山 貴世子

所在地：東京都調布市国領町3-8-15

電話番号：042-487-4111

①	幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究 (平成18・19年度)
---	---

I 研究指定校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

昭和52年4月に開園し、平成18年に創立30周年を迎えた。施設は10階建て集合住宅の1階部分を園舎として使用している。幼児期には実体験をすることが大切であると考え、近隣の公園などでの自然観察や園バスを利用して市内、市外の自然園・博物館などへ行く園外保育を多く実施している。9名の教員の内2名が男性保育者で、男女それぞれのよい点を出し合い、幼児とかかわりながら保育をしている。調布市は現在マンションなど大型住宅の建設が盛んで、それに伴い幼児人口も増えている。

2 学校の概要 (平成19年5月1日現在)

		満3 歳児	3歳 児	4歳 児	5歳 児	計	
学級数		0	3	3	2	8	
園児数	男	0	32	40	33	105	教員数 9名
	女	0	35	38	31	104	
計		0	67	78	64	209	

II 研究の内容及び成果等

1 研究主題等

(1) 研究主題

人とかかわる力を育てるための指導

(2) 研究主題設定のねらい

「人とかかわる力」が現在の社会において

弱くなっているという傾向は、以前より言われていることである。本園でも「自分から遊びに入れない幼児」は以前からいたが、「遊びに入らなくてもかまわないという幼児」が数年前より少しずつが見られるようになってきたように感じる。それは生活や遊びの中でおこる、けんか、葛藤、我慢、悲しさ、悔しさなど、人とかかわりによって生じる事柄を、自分で解決できず避けていることが原因なのではないかと思われる。友達とかかわって遊ぶ楽しさを心から感じ、人とかかわることによって自分自身が成長することを、幼児なりに体感していくことが必要だと考えた。

(3) 2年間の主な取組

[平成18年度の主な成果と課題]

成果：人とかかわり、自己実現とは、幼児にとって具体的にどのようなことかを事例、文献などから考察し教師が共通理解する。また事例をもとに、年齢別の人とかかわる力の発達の一覧を作成する。課題：幼児が人とかかわりを「したか、しなかったか。」ということの評価の基準として研究を進めていた部分が多かった。幼児の姿をより確かにとらえ、実態などを分析する際にも、幼児の興味やこだわりについて深く見つめるなど、視点を広く深くもつ力を教師全員が今以上に身に付け、研究に取り組むことが課題となった。

[平成19年度の主な取組]

人とかかわる力の発達の構造について仮説を立て、研究の方向を明確にする。具体的な研究内容として、幼児が人とかかわる力の表を期ごとに分け作成し、文献を通して幼児をとりまく社会的背景などの実態をまとめる。18年同様、各クラスが園内研究を行い、幼児の実態と教師の指導について考察する。また、定期的に外部講師を招き研究会を行い、指導や事例考察などについての助言を受ける。11月28日に東京都、近隣の幼稚園関係者に来園していただき、公開保育、研究発表会を行う。

2 教育課程の編成

(1) 教育目標と内容

心もからだもじょうぶな子
<ul style="list-style-type: none">・情緒の安定・健やかな心と体・基本的な生活習慣の自立・自発的、自立的態度・生活のけじめ・物事に真剣に立ち向かう

くふうしてよく考える子
<ul style="list-style-type: none">・知的な好奇心・自分で考え、自分で行動する・感動的な体験・想像性、創造性の芽生え・探索と試行錯誤・豊かな表現・工夫する態度

思いやりのあるやさしい子
<ul style="list-style-type: none">・遊びに即した環境作り・温かい心で相手を容認する・安定した人間関係・集団生活への適応・飼育物を大事にする・進んで身近な人とかわる

(2) 教育課程の基本事項

- ・人間性豊かな幼児の育成を目指し、健康な身体の育成、進んで身近な人とかわり愛情や信頼感をもつ。また、身近な事物や事象に興味や関心をもち、生活の様々な場面で、自分なりに考えて自分の力で行ってみようとする心情や態度を育てることへの筋道を明確にする。
- ・幼児教育は、幼児期の特性を跨まえ、環境を通して行うという基本にたって、教育課程の全体を総合的に検討する。
- ・幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさ

わしい生活が展開されるような経験や活動が用意されているかを明確にする。

- ・遊びを通して、ねらいを達成するという基本を明確にする。
- ・幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導に応ずるようにする。

(3) 指導の基本方針

- ・主体的なものごとに取り組む幼児の育成を目指すことを基本方針とする。
- ・幼児が自分から遊びに取り組んでいける環境を用意し、その遊びがより充実するように、教師のかかわりを工夫する。
- ・幼児同士が共に生活する中で、様々な感情体験を味わうとともに、自己を表現する力を育てる。
- ・幼児が様々な体験をする機会をもち、日常生活の中に生かされるように指導計画に位置づける。

(4) 学級目標

3歳児

- ・幼稚園生活に慣れる。
- ・いろいろなことに興味をもつ。
- ・好きな遊びを見つけてする。
- ・基本的な生活習慣を身につける。

4歳児

- ・新しい環境に親しみをもって生活する。
- ・自分のやりたい遊びに力いっぱい取り組む。
- ・友達と積極的にかかわりながら、喜びや悲しみを共感する。

5歳児

- ・新しい環境に親しみをもって生活する。
- ・友達とのかかわりの楽しさを感じ、主体的に動く。
- ・やり始めたことは最後までやり遂げる。
- ・元気に遊び、遊びを楽しく進める。

3 研究の内容及び具体的な研究活動

(1) 具体的な研究課題

- ・ 幼児の人とかかわる力はどのように育っていくのかを明らかにする。
- ・ 人とかかわる力を育てるための指導内容を考察する。

(2) 取組

① 幼児をとりまく現代社会について考察する。

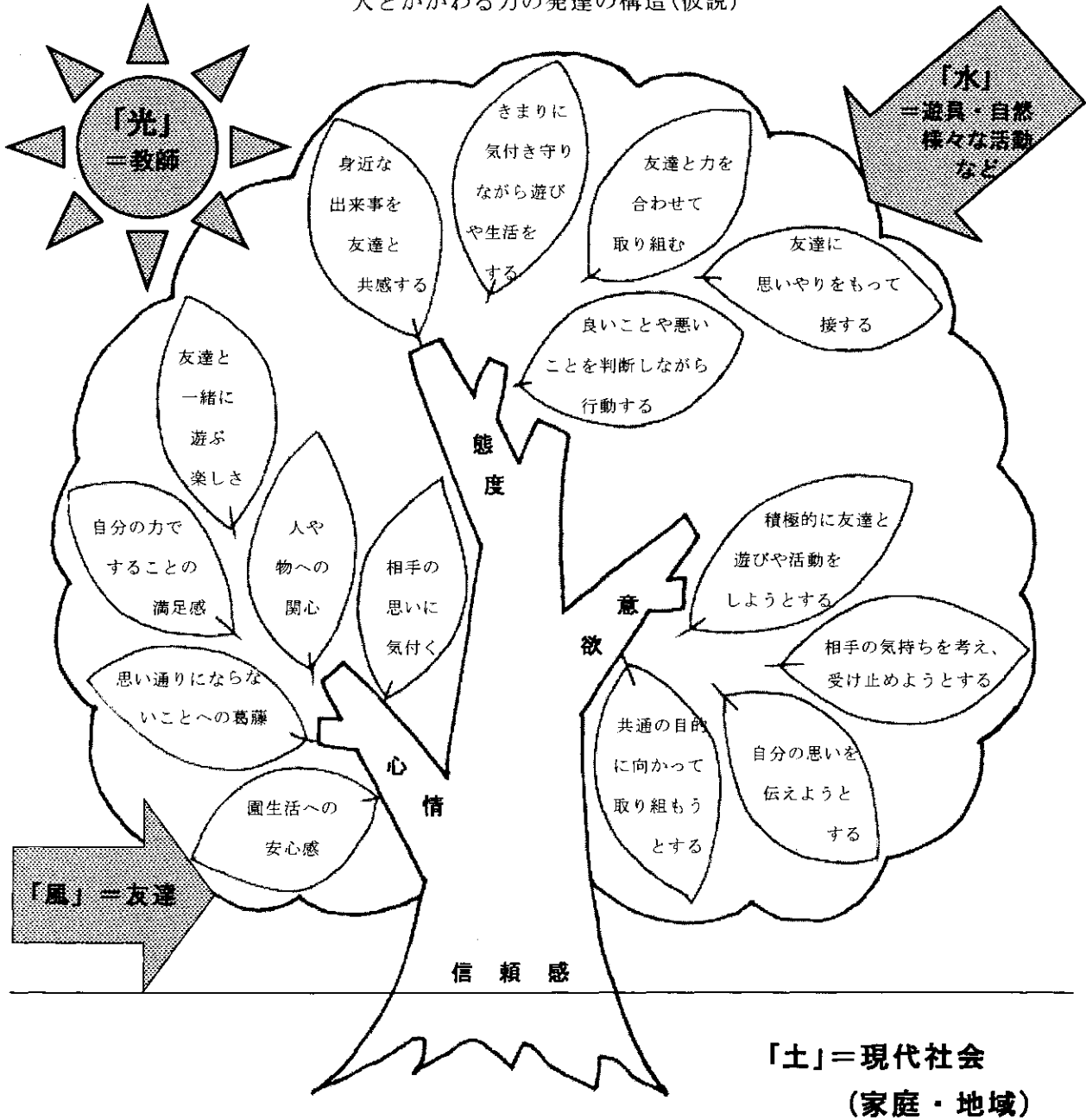
- ・ 社会的な問題として少子化傾向がある。家庭の中には「父親の役割」「母親の役割」があり、それが「家族」として成立するものである。しかし、近年の成人者には人とかかわる力が弱い人も見られ、そのことが幼児を生み育てるという意識を低下させており、幼児人口の減少の理由の一つになっていると考えられている。本来人間は群れて育ちあうものであり、幼児期からいろいろな人と出会い、人とかかわりを経験していく必要がある。しかし少子化の進行によって、家族内でも兄弟姉妹が少なく、近所に遊ぶ友達がいない。そのために幼児が同年齢の友達とかかわる場が少なくなっていると考えられる。
- ・ 現代は、情報化社会と呼ばれている。特にテレビゲームの爆発的なブームは、幼児同士のかかわりや人と人とかかわる機会を減少させることになった。また、インターネットの普及は、世の中の生活スタイルを一変させる勢いであり、人とかかわりが希薄となる状況を生んでいる。情報化社会、メディア社会の中で、それらをどのように生活に取り入れていくかは、これからの子育てを考える上で極めて大きな課題である。
- ・ 建築ラッシュの中で、人が住むための住宅や工場の建設、交通網、整備のための道路建設などは、田畑を宅地化するなど

の自然環境を失わせてきた。自然に触れるという直接体験の貧しさは学習にも影響を及ぼしている。また新興住宅街に住む人の歴史は浅く、人間関係が希薄であり、積極的に近隣の人や家庭と関係をもととしない人も多い。

② 仮説 人とかかわる力の発達の構造

幼稚園教育要領には「幼稚園教育は、学校教育法第77条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と書かれている。また、幼稚園教育要領解説では「環境を構成するということは、物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況をつくり出すことなのである」という記述がある。これに基づき、幼稚園教育中での人とかかわる力の発達には、一つの構造があるのではと考えた。次の図は幼児の「人とかかわる力」を幼稚園という敷地の中に立つ1本の木に例えた場合、この木が生長し様々な心情・意欲・態度の葉を茂らせていく過程で、その成長に影響を与える環境的な要素として「土」「水」「光」「風」の四つの要素がある、ということを表すものである。例えば「光」を教師と位置づけたが、それは木を明るく照らし、その生長を促す光という要素が、幼児に直接働きかけ指導援助をしたり、遊び仲間の一員となって幼児と共に活動に取り組んだり、幼児の発達に適した環境を整えるなど、幼稚園生活の中での教師そのものであると考えたからである。このように4つの環境要素などを図に組み入れた、幼児の人とかかわる発達図を作り研究の仮説とした。

人とかかわる力の発達の構造(仮説)



③事例による研究

・本園の1日の保育は好きな遊び(自発的活動)の時間と課題活動(園行事や生活習慣に関する活動)の時間が交互に組み込まれるような形で計画されている。そこで、幼稚園生活の中での幼児の姿を以下のように二つに分け、それぞれの場面で幼児がどのように人とのかかわりを経験し、その中で何を学

んでいるのかについて考察する。

[好きな遊び(自発的活動)の中で見られる人とのかかわり]

幼稚園の中には保育室や園庭、遊戯室などの場所があり、そこには様々な遊具や玩具が置かれ、幼児はそれらに興味や関心をもつことで、自然にその場へ入っていく。幼児が興味や関心をもつ遊具や

玩具は一人一人の個性により異なるが、同じ遊具に興味をもった幼児同士はその「場」を共有することになり、そこには人とかかわりが生まれる。そのため、「今の時期の幼児が関心をもっているのは、どのような遊びか」

「遊びの場をどのように構成すれば、幼児同士がかかわりをもつことができるようになるか」などを、教師がよく考え環境を構成することが必要になってくる。

「私もお姉ちゃん」	～友達存在を意識する～	3歳児10月
<p>保育室のままごとコーナーでR児、T児、H児、U児、W児、M児が、ままごと遊びを始めた。教師がままごとの家のチャイムを鳴らす真似をすると、M児が「先生、入って！」と言って手招きした。教師がままごと遊びの家に入り、「ここはお姉さんたちのお家なの？」と聞くとU児が「違うよお姫様なの。」と答えた。この時、そばではO児、Y児、K児が立ったままこのやりとりを笑って見ている。教師がR児とT児に「RくとTくんは王子様なの？」と聞くと、R児が「僕はお父さんなの。」と答えた。それを聞いたT児は「僕はお兄ちゃん。」と答えた。</p> <p>H児、U児、W児、M児が台所で作った料理を次々に「はい、これはアイスクリーム。おもちゃです。」と言いながら教師のところに渡しに来た。O児、Y児、K児はその様子をそばで笑って見ているが、教師のところへ来ると、O児が「私とYちゃんとKちゃんはお姉ちゃんなの。」と言い、自分たちが作った料理や本を見せる。</p> <p>R児が、周りにいる友達や教師に聞こえるように「僕、お仕事に行つてきまあす！」と言い、それを聞いたT児も「僕も学校に行つてくるね！」と言ってままごとの家を出ていった。</p>		
<p>考 察</p>		
<p>O児、Y児、K児たちは普段から教師や友達に誘われてもなかなか遊びに入らず、仲の良い友達だけで遊ぶ傾向があった。この時も、最初はO児、Y児、K児たちは友達が遊んでいる様子を見ていることを楽しんでいただろう。しかし、この日は自分たちからままごと遊びに参加した。おそらく、ままごとをしていた場の雰囲気や会話の様子が楽しそうに思えたからではないかと考える。</p> <p>O児、Y児、K児たちの様子から、いつもとは違う友達との遊びに入ったことによって、たくさんの友達とかかわって遊ぶ楽しさを感じたのではないかと推察される。今後もO児、Y児、K児たちが遊びの中で、他の友達とかかわりが多くもてるようなきっかけや、自分たちから遊びの中に入っていけるような援助が必要ではないかと思う。</p> <p>3歳児の場合、同じ場においてもそれぞれの遊びに夢中になっている場面はよく見られるが、友達の発した言葉からも刺激を受けている。さらに、自分の知っていることを言葉で伝えながら、自分のしたい役になりきることを楽しんでいただろうと考える。3歳児のごっこ遊びの姿としては、幼児同士だけで会話のやりとりをしながら遊ぶことは難しい部分もあると思う。そこで、教師と一緒に遊びに入りながら一人一人のやりたい役、発した言葉に応えることによって、それぞれの幼児が役になりきって遊ぶ楽しさを味わえるように援助している。幼児と教師、幼児同士でもいつもと遊んでいる友達とは違う新しい友達とかかわりが徐々に見えてきているので、幅広くいろいろな人とかかわることができるような経験をさせたい。</p>		

〔課題活動（園行事や生活習慣に関する活動）の中で見られる人とのかかわり〕

幼稚園は、家庭とは違い大勢の同年齢または同世代の幼児の中で、集団の一員としてかかわり合うことができる場所である。「社会生活での望ましい習慣や態度を身に付ける」（幼稚園教育要領領域

「人間関係」ねらい）ということは教育機関としての幼稚園が果たすべき役割の一つでもあるが、他にも幼稚園という集団の中で、家庭ではできない様々な体験をしてほしいという目的のもとに、本園では教育課程に沿って独自の年間行事を設定している。

「僕が描いてあげるよ」	～友達と一緒に活動を楽しむ～	5歳児2月
<p>展覧会に向けての共同製作の船の飾りをみんなで分担して作っている。</p> <p>その時T児が教師に向かって「先生、僕は星を作って飾る人になりたいから机出して。」と言った。T児が周りの幼児にも声をかけ、星を作りたい幼児が数人T児のところへ集まってきた。その中にいたA児が「僕、星描けないんだけど・・・。」と言ったのを聞いてT児が「じゃあ僕が描いてあげるからそれを切って。」と言うとA児は「わかった!」と答えた。</p> <p>その後ずっとT児は画用紙にたくさん星を描き続け、A児はT児が描いた星を切って船に貼り、他にも取り組んでいた幼児と一緒に完成させた。</p>		
<p>考 察</p>		
<p>普段の遊びの中でT児は友達の中で自分の意見を強く言ったり、リーダーシップを発揮できる方ではない。しかし、製作は得意で自信をもっている。誰かに作った物をあげて喜ばせようとする事が多かった。この日は「星を描けない。」というA児に対して何とかしてあげたいという気持ちになったようだ。T児は作って飾る人になりたいと言っていたが、結局ひたすらA児に対して星の形を描いてあげるばかりで、船に星を貼ることはできなかった。しかし、友達の手助けをしているという満足感や、一緒に作っている喜びがT児にはあったようだ。</p> <p>このことから人とのかかわり方も場面によって違うということがわかった。多様な場面での経験を通して、得意分野だけでなく自己発揮し、人とかかわる力を養うことが必要ではないかと感じた。</p>		

(3) 成果・課題

仮説に基づき、環境構成、教師の役割、友達の存在の三つの視点から、人とかかわる力の育ちについて考察する。

〈好きな遊びの環境構成と幼児の人とかかわる姿〉

・幼稚園生活は、ほとんどの幼児にとって初めての集団生活の場である。入園したばかりの頃は不安感をもっているが、教師と信頼関係を築くことで園生活に安心感をもち始め、周りの様々なものに目が

向くようになってくる。園生活は教師と幼児の信頼関係の上に進められていくということが明らかになった。

・園生活に慣れ始めると、幼児は好きな遊具を見つけて遊ぶようになる。初めは、友達が同じ場で遊んでいても一人で黙々と自分のしたい遊びをする姿が見られるが、少しずつ友達に興味に向くようになる。このように遊びの場を共有する中で友達の存在を意識することが、人とかかわりの第一歩である

ということがわかった。

- ・園生活に慣れ始めると、幼児は好きな遊具を見つけて遊ぶようになる。初めは、友達が同じ場で遊んでいても一人で黙々と自分のしたい遊びをする姿が見られるが、少しずつ友達に興味が向くようになる。このように遊びの場を共有する中で友達の存在を意識することが、人とかかわりの第一歩であるということがわかった。
- ・この第一歩を踏み出すと、今度は遊びの場を共有する友達と言葉をやりとりする姿が見られるようになる。初めのうちは、それぞれが自分の遊びのイメージを話すだけで会話になっていない様子が見られるが、少しずつイメージを共有した会話に変わっていく。その後は遊びのイメージはより広がり、幼児は楽しい気持ちを友達と共感するようになっていく。
- ・友達と一緒に遊ぶ中で、一人では経験できない喜びや楽しさを味わうことができるが、その一方で自分がしたいと思う遊びができなくなる時もある。このような時、自分の思いを通そうとしたり、反対に自分の気持ちを抑えてしまったりする幼児の姿が見られる。3歳児では物や場所の取り合い、4・5歳児では意見の違いなどで衝突することが多いが、このような衝突を通して、幼児は相手にも思いがあることに気付いていくということを再確認した。

〈課題活動での環境構成と幼児の人とかかわる姿〉

- ・園生活の中には、みんなと一緒に何かをするという活動が多く取り込まれている。大勢の友達と一緒に同じことをする中で、気持ちを共感し合う幼児の姿が見られる。このような経験は、集団での活動へ積極的に取り組んでいくきっかけになると考

えられる。

- ・みんなと一緒に同じことをするという経験を重ねるうちに、集団の中での自分という存在を認めてもらいたいという気持ちが出てくる。その自己主張の仕方は年齢や個々の性格などによって違いがあるが、その思いが受け入れてもらえることにより幼児は自信をつけていくのではないかと考えられた。
- ・集団での遊びや活動に取り組む中で、幼児は少しずつ自分が集団の一員であることを意識するようになり、自分なりの目的をもつようになる。目的に向かって友達と一緒に遊びや活動に取り組み、達成された時の満足感を友達と共感することができるようになると、集団への意識はさらに高まり、活動へ取り組む意欲を強くもつようになるという姿を見ることができると考えられる。

〈教師の役割と人とかかわる力〉

- ・幼児の人とかかわる力を育てるために、教師がすべき役割は多岐にわたっている。第一には、幼児の気持ちを安定させるという役割があげられる。幼児は教師を心の支えとすることで、安心して遊びや活動に積極的に取り組むことができるようになる。教師は常に幼児一人一人を見守り、幼児に変化が見られた時には歩み寄って声をかける必要があると考えられる。
- ・第二に、幼児同士のかかわりをもたせるという役割がある。同じ場で同じような遊びをしていてもかかわりが見られない幼児や、特定の友達以外の幼児とはかかわりをもたない幼児には、教師が幼児同士をつなぐきっかけをつくる必要がある。教師と一緒に遊んでイメージを広げたりすることで、そこに幼児同士のかかわりが生まれ、友達とかかわる楽しさを知っ

ていくのだと考えられる。

- ・第三に、幼児それぞれの思いを引き出し受け止めるという役割があげられる。自分の思いを強く主張しすぎて友達と衝突したり、反対に言葉にできずに我慢していたりなど、自分の思いが相手に伝わらないという経験が多くなってしまうと、幼児は人とかかわることに対して不安を感じ消極的になる可能性がある。教師は幼児一人一人がどのような思いをもって遊びや活動に取り組んでいるのかを見極め、気持ちを引き出して受け止めたり、代弁して相手に伝えたりする。自分の思いが受け入れてもらえる充実感を味わうことにより、幼児の中に思いを伝えようという積極的な姿勢が生まれてくる。
- ・第四には、幼児と一緒に遊びや活動を進めていく役割である。幼児が友達と一緒に遊びや活動に取り組んでいる時、教師が参加することで遊びはより楽しいものとなる。その中で教師は、幼児と同じ目線に立ちながらも遊びや活動が楽しく展開していくように、導いたり手助けしたりする。その教師の姿がモデルとなって、幼児は友達と一緒に遊びや活動を進めていく方法を、自然に学んでいくのだと考えられる。

〈友達の存在と人とかかわる力〉

- ・幼児同士で遊ぶ姿を見守っていると、友達が困っている様子を見て手を差し伸べたり年下の幼児を手助けしたりする姿が見られる時がある。このような思いやりの気持ちは、自分が困った時に友達や教師に優しくしてもらったという経験を積むことで育ってくる。このような気持ちが育つと、遊びの中で友達の意見を聞き入れ自分たちで役割を分担したり、ルールを作ったりしながら遊びや活動を進めるなど、相手の気持ちを考え自分の気持

ちを調整して友達とかかわることができるようになってくる。このような幼児の姿は、友達を大切な存在として実感していることの表れであり、人とかかわる力を身に付けていることを感じさせられた。

- ・これらの幼児の姿は、それまでに友達と一緒に遊びや活動をすることの楽しさや喜び、達成感を共感できたという経験を積んできており、友達を大切な存在として実感していることの表れだと思われる。人に対してこのような気持ちを抱き、その気持ちを言葉や行動で表現している幼児の姿からは、人とかかわる力を身に付けていることを感じさせられた。

4 研究成果の普及

- ・平成19年11月28日(水)に研究の成果を発表する公開保育、研究発表会を行う。
- ・研究成果をまとめたものを冊子にして、東京都私立幼稚園協会、調布市私立幼稚園協会に提出する。また連携のある全国の幼稚園に配布する。

5 今後の展望

- ・研究を通して新たにわかった幼児の実態、指導援助、環境構成などを、教育課程、指導計画に書き加え、修正して全体の見直しをする。
- ・公開保育、研究発表を行う際に研究紀要を作成したが、そこに掲載されなかった事例を再考察し、事例集を作成する。
- ・今研究で勉強した事例の取り方や考察の方法によって、各教師は今まで以上に幼児理解を深めることができた。今後も継続して事例や記録を取り、検討することで、日々の保育に生かしていく。

資 料

教育課程研究指定校事業実施要項	3 5
平成 1 8 ・ 1 9 年度教育課程研究指定校事業指定校一覧	3 8
教育課程研究指定校事業（平成 1 8 ・ 1 9 年度指定）担当官	3 8

教育課程研究指定校事業実施要項

平成18年4月1日
国立教育政策研究所長決定

1 趣 旨

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校（以下「学校」という。）における教育課程及び指導方法等について調査研究を行い、もって学校教育の改善充実に資する。

2 研究指定校事業の委嘱

- (1) 都道府県教育委員会、都道府県知事又は附属学校を置く国立大学法人学長は、都道府県教育委員会にあっては域内又は所管の学校、都道府県知事にあっては所轄の学校、附属学校を置く国立大学法人学長にあっては所管の学校のうち、教育課程研究指定校（以下「研究指定校」という。）による研究の希望がある場合には、適切な学校を選定し、別紙様式により、国立教育政策研究所に提出するものとする。
- (2) 国立教育政策研究所は、上記（1）により提出のあった内容を審査し、本事業の委嘱が適当と認めた場合、別途定める実施計画書の提出を求める。
- (3) 国立教育政策研究所は、上記（2）により提出のあった実施計画書が適切であると認めた場合、公立学校にあっては当該都道府県教育委員会、私立学校にあっては当該学校の設置者、国立大学法人附属学校にあっては当該国立大学法人学長（以下「都道府県教育委員会等」という。）に調査研究を委嘱する。

3 研究期間

研究期間は、原則として2か年とする。

4 指定校数

60校程度とする。

5 研究主題

研究指定校は、国立教育政策研究所が別に設定する研究主題に関し、研究を行うものとする。

6 研究指定校の運営等

- (1) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、国立教育政策研究所と密接な連絡をとり、その援助と助言を受けて調査研究を行うものとする。
- (2) 国立教育政策研究所は、研究の円滑な実施に資するため、連絡協議会並びに研究協議会を開催する。なお、研究協議会は成果の普及のために公開とすることも検討する。

7 報告書等の提出

- (1) 研究指定校は、校内の研究体制を整備し、計画的、継続的に研究を進めるために、各年度の初めに実施計画書を、各年度の終わりに研究成果報告書を都道府県教育委員会等に提出するものとする。
なお、研究成果報告書の作成に当たっては、調査研究による児童生徒の変容（意識、態度、学力など）、教職員や保護者等の意識の変容の把握などについて、アンケート結果などの定量的なデータを比較するなど、分かりやすい示し方を工夫する。
- (2) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、研究指定校の実施計画書及び研究成果報告書を取り

まとめ、都道府県教育委員会及び国立大学法人学長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

なお、研究成果報告書については、第1年次の終了時に中間報告書を、研究の終了時に最終の報告書を提出するものとし、これらの様式、その他必要な事項については、国立教育政策研究所から別途連絡するものとする。

8 成果の普及

- (1) 研究成果報告書については、国立教育政策研究所においてその集録を編集し、書籍、インターネット及びその他の媒体により公表することができるものとする。
- (2) 研究指定校においては、地域や学校の実態に応じて、成果発表会、公開授業、研修会等の開催、インターネットによる情報提供などの取組を実施することにより、本事業の成果を他校と共有し成果の普及を図るよう、積極的な情報提供を行うものとする。

9 経費

- (1) 国立教育政策研究所は、予算の範囲内で、各年度毎に研究に必要な所要額を都道府県教育委員会等からの請求に基づいて支払うものとする。
- (2) 委嘱金の支払いの対象となる経費及び各経費項目への配分額は、実施計画書のとおりとし、変更する場合はあらかじめ国立教育政策研究所に報告し、その指示を受けるものとする。ただし、各経費項目における配分額の変更増減が委嘱金額の20%以内、もしくは、5万円以内の場合には、この限りでない。
- (3) 委嘱を受けた都道府県教育委員会等は、各年度終了後速やかに別途定める収支精算書を、都道府県教育委員会及び国立大学法人学長においては直接、私立学校の設置者においては当該都道府県知事を経由して、国立教育政策研究所に提出するものとする。

10 その他

国立教育政策研究所は、必要に応じて、研究の実施状況及び経費の処理状況について実態調査を行う。

平成19年度教育課程研究指定校事業研究主題

(1) 幼稚園

- ① 幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究
(平成18・19年度)

一人一人の幼児の発達には、同年代の幼児と教師が共に生活する中で促されていく。特に幼児が自分らしさを発揮して、学級集団の中で相互にかかわり合い、葛藤や挫折を体験しながらも、刺激を受け合ったり、認め合ったりなどして自己実現を図ることは「生きる力」の基礎を培う上で重要である。

このため、幼児一人一人が自己実現を図るための指導の在り方や幼児同士をつなぐ学級集団の在り方について研究する。

教育課程研究指定校事業研究指定校一覧(校種別)

— 平成19年度 —

【幼稚園】

	都道府県名	学校名	研究主題	教科等	設置者	備考
1	13 東京都	荒川区立南千住第二幼稚園	①		公立	
3	40 福岡県	北九州市立八幡東幼稚園	①		公立	
5	13 東京都	学校法人駿河台大学第一幼稚園	①		私立	

研究主題① 幼児一人一人が集団とのかかわりの中で自己実現を図るための指導の在り方に関する研究(幼稚園)

担当官

廣瀬 雅哉	文部科学省初等中等教育局視学官
宍戸 和成	文部科学省初等中等教育局視学官
篠原 孝子	国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

この研究報告書を刊行するにあたり、平成20年4月1日から関わった担当官

吉川 成夫	文部科学省初等中等教育局視学官
-------	-----------------